

きよ す じょう か まち い せき

清洲城下町遺跡 発掘調査通信 2018

平成30年11月1日

(公財) 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
株式会社 アコード

1. はじめに

清洲城下町遺跡の発掘調査は、五条川に関わる総合治水対策特定河川事業に伴う事前調査として、平成30年6月より進めて参りました。皆様のご理解とご協力により、発掘調査をこの10月12日をもちまして無事終了することができました。新たにわかりました主な調査成果を報告致します。



↑ 発掘調査区の遠景 (南より)

2. 発掘調査の成果

このたびの調査は、五条川の船枳橋に隣接する東岸河川敷の地点で、発掘調査を実施した順に18A区～18F区に分けて調査しました。見つかった遺構(いこう)と出土遺物(しゅつどいぶつ)には鎌倉(かまくら)時代から江戸(えど)時代の大きく2時期のものがありませんでした。

(1) 鎌倉(かまくら)時代(今から約800年前～700年前)

遺構は見つかりませんでした。戦国時代の遺構や下層の河川の砂の地層から山茶碗(やまちゃわん)と小皿(こさら)、甕(かめ)が少数見つかりました。

(2) 戦国(せんごく)時代から江戸時代前期(今から約500年前～300年前)

井戸(いど)7基、溝(みぞ)63条、柱穴列2基、土坑(どこう)30基、自然流路1条を確認することができました。この中で18C区で見つかった自然流路が最も古く、東北東から西南西に流れていることがわかりました。その後自然流路



↑ 18A区で見つかった戦国時代の自然流路043NR(北西より)

に重複して、溝や井戸が掘られており、戦国時代の終わりにこの地点が城下町として開発されたことがわかりました。今回の調査では、幅0.3m前後の小溝から幅5mを超える大溝まで、複雑に切り合って見つかったことが大きな特徴です。これらの大小の溝に画された区画は、何度も町割を変えて配置をされたものと考えられるものです。井戸は五条川の東側堤防に沿って、一定の間隔で並んでみつけられました。このように並んで見つかる井戸は、町屋の家ごとに営まれた井戸が推定されるものです。

出土遺物には、灰釉（かいゆう）や鉄釉（てつゆう）、長石釉（ちょうせきゆう）で施釉された壺（つぼ）・天目茶碗（てんもくちゃわん）・皿（さら）・播鉢（すりばち）、磁器（じき）の小皿、土師器（はじき）の鍋（なべ）・皿・小皿、瓦（かわら）などがあります。長石釉で施釉された焼き物は、清洲城下町遺跡の華やかで盛んな営みの特徴づける焼き物の一つです。

3. まとめ

清洲城下町遺跡では、これまでに多くの発掘調査が行われ、江戸時代の古城絵図などを参考に戦国時代のおおよその姿が復元されています。今回の調査地点は16世紀末～17世紀初頭における清洲城下町遺跡の中で、中堀と外堀の間にある町家推定域の地点に当たりますが、その中でも多様な性格を持つ区画が存在することが明らかになりました。今後は調査した記録と出土遺物の整理を行い、清洲城下町の歴史とその特徴について明らかにしていきたいと思えます。

最後に、近隣住民の皆様、関係者の皆様には多大なご支援を頂き、誠にありがとうございました。今後ともご理解・ご協力の程、宜しく願い申し上げます。



↑ 18F 区全景（東より）



↑ 18A 区全景（西より）



↑ 18D 区の区画溝 017SD（南東より）



↑ 18C 区の区画溝 040SD より出土した曲物（南より）



↑ 18E 区の区画溝 060SD 遺物出土状況（北より）